

雲仙普賢岳、火砕流、土石流による甚大な災害現場を視察して

宮本 理一郎

南島原市役所を訪問し、危機管理専門員などの方々から地域の概要、普賢岳噴火当時の記録映像などを観ながら説明を受けました。

南島原市は県南部の島原半島に位置し、農業が盛んな地域で、江戸時代キリスト教との深い関わりを持っており「キリタン弾圧」が始まり「島原の乱」の終焉の地ともなりました。

平成21年、島原半島は日本最初の「世界ジオパーク」※に認定されました。農産物の他に、素麺も特産で全国2位の生産量を誇っています。

この穏やかな地域に平成2年11月17日、198年ぶりに雲仙普賢岳が噴火し、平成5年5月からは度重なる火砕流や土石流が発生し、多くの尊い命や家屋、家畜、農地が犠牲になり、公共施設などにも甚大な被害をもたらしました。現在、火山活動は沈静化していますが、今後も予想される更なる土石流の発生から地域住民の生命財産を守るため、「雲仙普賢岳火山砂防事業」を推進中でした。

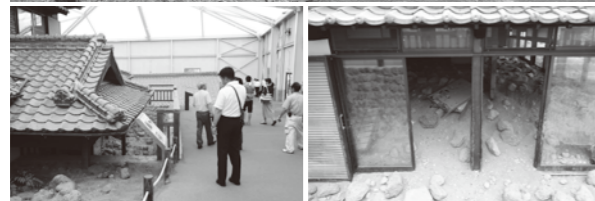
自然の力は強大であり、人知の及ぶ処ではありませんが、有事の際のため、その備えはしておかなければならないと痛感しました。また、その災害をも観光資源としてここまで復旧した地域の力を感じました。

※島原半島ジオパーク

島原半島ジオパークは、中央に世界有数の活火山である雲仙火山を擁する世界ジオパークである。雲仙火山は有史に3回の噴火を起こし、1792年の島原大変肥後迷惑や、1990年から約5年間継続した噴火とその長期災害など、人々の暮らしに大きく影響を与えてきた。しかし、繰り返して生じる雲仙火山の噴火に向き合い、その災害から何度も復興し、雲仙火山が作り出す大地の恵みを活用しながら生きてきた人々が暮らす、「活火山と人との共生」がテーマのジオパークである。

○土石流被災家屋保存公園「道の駅みずなし本陣」

この公園は、土石流災害で罹災した家屋を後世に伝えるために、保存公開している施設です。被災家屋11棟を当時の状況で保存しています。周辺は約3mの土砂で埋没しましたが流れが緩やかだったため、家屋の破壊倒壊が免れ現在に至っています。



○旧大野木場小学校被災校舎「砂防みらい館」

平成3年9月15日18時54分に発生した大火砕流により、付近家屋153棟と共に小学校は罹災しました。深江町では、避難が徹底し、人的被害はなかったものの、この災害の驚異と自然災害の凄まじさを継承する火砕流遺構、砂防学習拠点のひとつとして保存しています。



委員長視察研修 (長崎県)

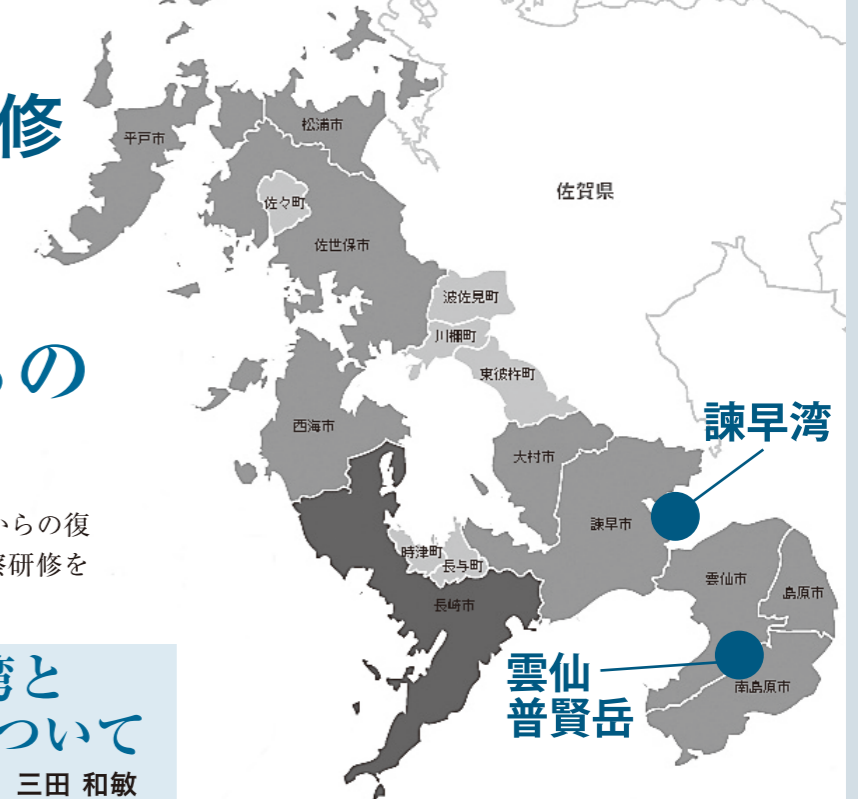
平成28年7月26日(火)～27日(水)

自然災害からの復興と現状

7月26日、27日の2日間「自然災害からの復興と現状」を学ぶため長崎県への視察研修を行いました。

600年に渡る諫早湾と諫早平野の歴史について

三田 和敏



諫早湾は昭和61年度に着手された事業で平成19年度の完成。新たに700haの農地、約7kmの潮受堤防ができ降雨を一時的に貯水することができる調整池があります。最初現場で、幅100m、長さ500m、800mの農地を見ながら説明を受けました。一面紫蘇の葉が植わる農地、農閑期のせいか地面が目立っていましたが、広大な農地は圧巻で、家のトラクターでは何日かかることやらと一人で苦笑しました。

その後、事務所で県担当者より、諫早湾干拓の歴史を聴きました。有明海は筑後川などの大きな川から砂や泥、阿蘇山などの火山灰を運んでくる。有明海の中央から奥におよそ半時計回りの潮の流れがあり、小さい砂や泥、火山灰はゆっくり運ばれ、諫早湾のような流れが遅くなった所に満潮時に運ばれて、干潮時に取り残される。それが繰り返され堆積し、水が流れなくなる。苦労して土砂を取り除くが、いよいよ取り除くことができなくなって、干潟の土砂を囲むように堤防を築いて干拓し農地を作る。この繰り返しがやってきたと説明がありました。

現在は干拓地で営農が始まり、36の法人と個人で約580haを耕作しているとのことでした。調整池を水源とする農業用水を利用し麦、大豆、野菜(24種類)飼料作物、施設園芸(8種類)を作付けしているそうです。大区画で平坦な優良農地を活かした日本の農業をリードするモデル的な大規模・環境保全型農業を推進しています。

諫早湾の干拓、広大な農地の造成、深刻な漁業被害があり、潮受け堤防の開門など、司法の場で争っているとのイメージでした。今回の視察で感じたことは、まず自分の目で確かめる、議会の調査権を行使する重要性を改めて再認識しました。



諫早湾潮受堤防